PUBLIC HEALTH

公衆衛生学研究科

国際色豊かな学習環境
様々なバックグラウンドを持つ学生が切磋琢磨できる

公衆衛生学研究科では、国際基準で必須とされる「疫学」、「生物統計学」、「社会行動科学」、「保健行政・医療管理学」、「産業環境保健学」の5分野を充実させたカリキュラムを採用しています。特に注目が高いのは、毎年1月～2月にかけて開講するハーバード特別講義です。ハーバード大学をはじめ、ケンブリッジ大学、ダラム大学などの提携校から毎年5名の客員教授が来日し講義を行っています。各分野の海外最新事情や最先端の知識に触れることができ、アメリカ、タイ、フィリピン、中国などの提携校からも受講生が参加し、グローバルな環境の中で授業が展開されます。

学生指導において最も重視するのは、講義や演習で培った知識・技能を実践の場で役立てる能力として集大成する課題研究です。課題研究では、学生の希望する分野の指導教員だけでなく、学生担任であるアカデミックアドバイザーやその他広く全教員からアドバイスを求める機会が提供されています。さらに、学生同士のディスカッションも重視しており、医療分野に限らない様々なバックグラウンドを持った学生がディスカッションすることで、広範かつ多様な視点を身につけることができるでしょう。

東日本大震災以降、災害への対策やレジリエンスの構築に際し、公衆衛生学はますます重視されています。本研究科でも、宮城県石巻で現地の実務家や研究者と協力して、支援・研究を行い、学会などを通じて報告、論文の形にまとめて海外への発信もしています。

MPHとDrPHのコンピテンシー

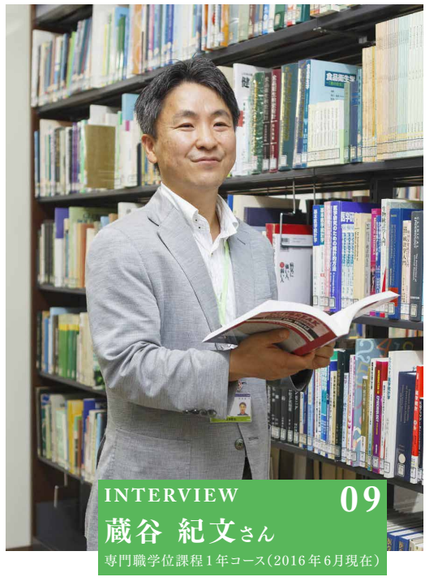
公衆衛生の実務の場では勉学の知識や問題解決のためのデータ分析以上のことが求められます。帝京大学公衆衛生学研究科では次の８つのコンピテンシーを日本での Master of Public Health (MPH) と Doctor of Public Health (DrPH) 取得者に必要と考えて教育しています。

DIVISION OF PUBLIC HEALTH

公衆衛生学専攻

主な研究分野

専門職学位課程 Master of Public Health（MPH）		博士後期課程 Doctor of Public Health（DrPH）
疫学	保健行政・医療管理学	疫学・生物統計学
生物統計学	産業環境保健学	産業保健・環境保健学
社会行動科学		保健政策・医療管理学



INTERVIEW 09
蔵谷 紀文さん
専門職学位課程１年コース（2016年６月現在）

疫学の考え方を臨床へ、臨床医が疫学を学ぶわけとは

子どもの麻酔を専門とする麻酔科医として20年以上になりますが、その間、大学院博士課程で基礎研究を行なって学位を取得し、現在は埼玉県立小児医療センター麻酔科部長という本務の間を縫って、再び公衆衛生大学院で疫学と生物統計を中心に学んでいます。

臨床医は常に患者さんと1対1で向き合っていますが、疫学は常に集団を対象にして疾病の原因や治療についての因果関係を追求します。あることがきっかけで"ロスマンの疫学"を読む機会があったのですが、"What is causation?" という章の記述に深い感銘を受け、こういう考えを持つ人達とディスカッションしてみたいと思いました。ロスマンの疫学は本大学院の先生方が翻訳されています。また、私は米国ボストンの Children's Hospital で小児麻酔のトレーニングを受けましたが、本大学院はハーバード大学院とのつながりがありますし、教官には同大学院卒の先生も多く、海外までいかなくても同じレベルの教育が受けられるのも魅力の一つです。

手術を受ける子どもたちに最良の周術期管理を提供するためには、国内外の最新の研究結果に精通しておく必要があります。インターネットを通じて大量の文献が溢れる時代ですが、その中から適切に行われた研究を取捨選択するのは疫学や生物統計の知識が必要です。

世界で評価される臨床研究には、現代の倫理基準に見合った適切なデザインに基づいた計画と得られた結果を科学的に解釈することが求められています。このようなことも全てこの1年で学ぶ予定です。

発展途上国の保健行政を支える人材を育てたい

大学に入る前から発展途上国の人たちのために働きたいと憧れ、医療や健康維持の技術・知識を身に付けようと看護師になり、海外の医療支援活動にも力を入れている病院に就職しました。就職当初から途上国支援に携わることを目標に、看護の実践に励んでいたところ、念願がかなってフィリピンの地域保健事業に派遣されました。そこで目にした現実は、私の想像をはるかに超えていました。大勢の大人や子どもが病気に苦しんでいたのです。乳児健診や予防接種、清潔な環境づくりといった公衆衛生が行き届いていれば、もっと健康に暮らし、長生きできるのではと考えると、予防医学や公衆衛生の重要性を再認識せずにはいられませんでした。

帰国後は、フィリピンでの経験を活かしたいと、開発途上国の公衆衛生の向上を支援する開発コンサルタントとして働き始めました。しかし、働くほどに行動の裏付けとなる知識の重要性を痛感し、大学院の門を叩きました。昨年、本研究科の専門職学位課程を修了し、博士後期課程へ進学しました。現在は、研究を通じて、日々、保健行政のあり方を模索しています。

国民の命と健康を守ることは、国づくりの根幹を成します。日本での研究成果や知見を活かして途上国の保健行政の仕組みや制度を整備するとともに、その制度を現地の人たちだけで運用できるよう、公衆衛生を支える高度な専門性を備えた人材を育てることで、国づくりを支援できるようになりたいですね。

INTERVIEW 10
西野 真理さん
博士後期課程１年（2016年６月現在）